

平成 20、21 年度
中期目標の達成状況報告書
(別添資料)

平成 22 年 6 月
愛知教育大学

目 次

- 【資料 1】 AUE Monthly 第 21 号(2010 年 4 月 1 日発行) 全学 FD(3/11)記事 . . . 1
- 【資料 2】 学生による授業アンケート結果の年次比較
(17年度と21年度の比較) 2
- 【資料 3】 愛知教育大学と豊橋技術科学大学との単位互換協定書 3
- 【資料 4】 平成21年度前期・後期 学生による授業アンケート結果提出状況 . . . 4
- 【資料 5】 平成21年度後期 教員による自己評価書の例 (一部抜粋) 5
- 【資料 6】 「愛教大の『授業』 ! 授業改善独自の工夫ティップス集」
(pp. 54~55より抜粋) 6



全学FD(3/11)

「学士課程 Faculty Development ～学生の学修向上のための授業改善と今後の全学FDの在り方～」が3月11日(木)、第五会議室で開催された。2月22日の(月)のチップス集をもとにした授業改善に続く授業改善推進の全学FDで、今回は特に同一授業科目名の授業、複数教員担当の授業(共通科目と専門教育科目)について、担当教員間でどう協働的に取り組むべきかを課題として意見交換がなされた。併せて今後のFDのあり方についての提言も行われた。



今回のFDに先だって、昨年12月中旬にそれぞれの科目の担当教員グループに依頼された、昨年度の学業成績による担当クラスごとのGPA(Grade Point Average)分布、GPC(Grade Point Class Average)のデータも参考資料として提供された。それぞれの担当科目の授業目標と成績評価について共有すべき点の確認や授業改善の取り組みについて話し合いが行われ、各担当グループから寄せられた報告を集約・分析し、それを踏まえての全学FDとなった。

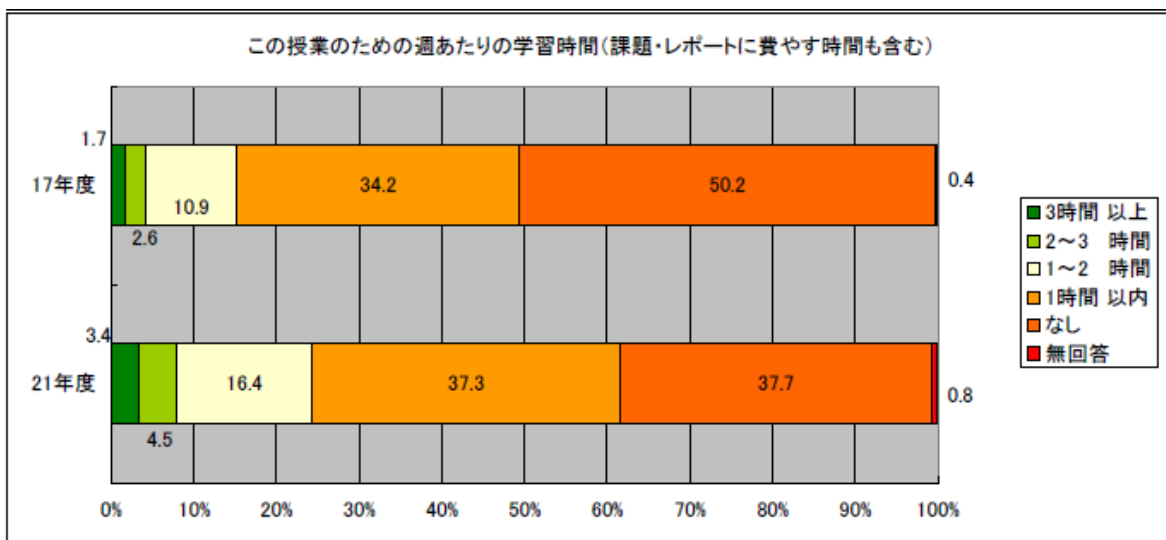
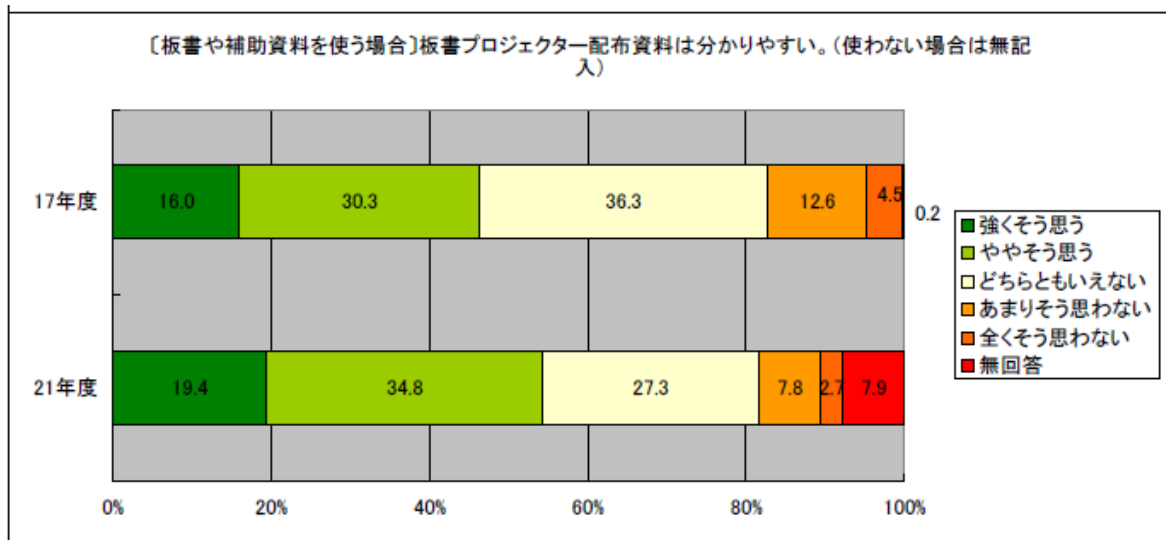
はじめに佐藤洋一教育担当理事が開催のあいさつに続いて、本年度前期の「自己評価書」(教員対象のアンケート)から授業改善の典型的事例を紹介。「授業評価」結果(学生対象のアンケート)は4年前のものと比較し、教員側の改善工夫の推進がみられること、学生側の受動的学習傾向と多様化(2極化)が進行していることを指摘した。また、誰もが求めている「役に立つ」FDとするため、多くの学生の参画も念頭に計画的に取り組んでいくことの重要性を強調した。その後、大学教育・教員養成開発センターFD・学習支援部門太田弘一兼担当教員より、教育目標と成績評価について、事前配布資料に基づいて、各教育単位FDの状況が紹介され、教育目標と成績評価については、大半の教育単位で共通理解と何らかの合意に向け努力がされていると本学の全体的状況が示された。次に、生活科教育、数学科教育などの各教員がそれぞれ具体的な取り組み例を紹介した。

最後のテーマは今後のFDの在り方で同センター同部門の大澤秀介兼担当教員から、報告で出されたFDに関する要望や全国レベルで取り組みが盛り上がっている「学生FDサミット」への参加経験を踏まえて、以下のような大胆な提言が紹介された。

- ◆学生・職員参加型FDを行う。ボランティアの学生・教職員教育改善委員会を立ち上げ、「愛教大CoNandE(こんなんで)委員会」[Committee of Non-obligation and Edutainment(義務でなく教育を楽しむ委員会)]と呼び、そのスタッフ(委員)は「あいこねスタッフ」と呼ぶ。
- ◆楽しむFDを行う。教員間で日常的に話し合えるコミュニティーの復活。学生・教員によるホーム・パーティー式ワークショップや「あいこねスタッフ」が企画するコンテスト(Best Teachers賞・Bestシラバス賞など)、教職員しゃべり場(食事・喫茶・談話室)等の企画を立ち上げる。
- ◆楽しむFDのキーワードは、Food & Drink!

最後に佐藤理事が提起された非常勤講師を含めて話し合えるため学外者用旅費の支給、役に立つFD・楽しいコミュニティー型FD、本学憲章に謳われている学生参画型のFD・SDなどについては、是非実現できるよう方策を早く示すよう準備し、2010年度の授業改善の取り組みを推進したい旨のまとめの言葉があり、充実した会議を終了した。

【資料2】 学生による授業アンケート結果の年次比較（17年度と21年度の比較）



（出典：愛知教育大学ホームページ掲載
教育創造開発機構 大学教育・教員養成開発センター FD・学習支援部門の報告書・資料より）

【資料3】愛知教育大学と豊橋技術科学大学との単位互換協定書

愛知教育大学大学院教育学研究科と豊橋技術科学大学大学院工学研究科
との単位互換に関する協定書

国立大学法人愛知教育大学（以下「甲」という。）と国立大学法人豊橋技術科学大学（以下「乙」という。）は、両大学間の交流と協力を促進し、教育内容の充実を図ることを目的として、次のとおり単位互換協定（以下「本協定」という。）を締結する。

（受入れ）

第1条 両大学の大学院に在学する学生が、他方の大学の大学院の授業科目の履修及び単位の修得を希望する時は、受入大学の長は、教育研究上の支障がない限り、当該学生を受け入れることができる。

（受入学生の身分）

第2条 両大学は、前条により受け入れた学生を、「特別聴講学生」として取り扱うものとする。

（受入時期及び履修期間）

第3条 特別聴講学生の受入時期は、別に定める。

2 特別聴講学生の履修期間は、1年以内とし、当該年度を超えないものとする。

（履修科目の範囲及び単位数）

第4条 特別聴講学生として履修できる授業科目の範囲及び単位数は別に定める。

（受入学生数）

第5条 両大学が受け入れる学生数は、別に定める。

（受入手続）

第6条 特別聴講学生の受入手続は、別に定める。

（単位の認定方法等）

第7条 特別聴講学生の授業科目の履修方法、試験実施方法、成績評価及び単位の授与等については、受入大学の定めるところによる。

2 特別聴講学生が履修した授業科目の単位の認定については、学生の所属する大学の定めるところによる。

（授業料等）

第8条 特別聴講学生の検定料、入学金及び授業料は徴収しない。ただし、別途必要な教材費等については、受入大学の定めるところによる。

（実施期日）

第9条 本協定は、平成22年4月1日から実施する。

（有効期間）

第10条 本協定の有効期間は、前条に規定する実施期日から2年間とする。ただし、本協定書の有効期間満了の6か月前までに、甲又は乙のいずれかの大学から特段の申し出がない場合は、自動的に更新されるものとする。

（その他）

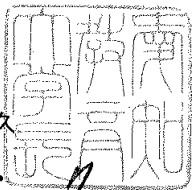
第11条 本協定に定めるもののほか、必要な事項は、両大学がその都度協議のうえ、決定するものとする。

この協定書は2通作成し、両大学で各1通を所持するものとする。

平成22年 3月 2日

（甲）

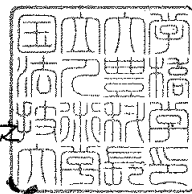
国立大学法人
愛知教育大学長
松田 正久



松田 正久

（乙）

国立大学法人
豊橋技術科学大学長
榊 佳之



榊 佳之

【資料4】平成21年度前期・後期 学生による授業アンケート提出状況

授業系別	配布クラス数	回収クラス数	未回収クラス数	クラス別回収率(%)	提出者数(人)	受講者に対する回収率(※)(%)
教科研究科目 (S2)	174	164	10	94.3	6,574	80.8
教科教育科目 (M1)	117	113	4	96.6	5,029	86.7
教科教育科目 (M2)	87	79	8	90.8	2,558	78.4
教育科目 (E)	153	141	12	92.2	7,602	65.0
総合演習	131	102	29	77.9		
選択教育科目 (E選)	33	33	0	100.0	1,677	78.0
教育関連科目 (Es)	2	2	0	100.0	2	100.0
保育内容研究科目 (Mc)	8	5	3	62.5	98	96.1
全体 (提出者数は延べ人数)	705	639	66	90.6	23,540	75.6

※ 成績評価 (S, A, B, C, D) を受けた者に対する回収率

(出典：愛知教育大学ホームページ掲載

教育創造開発機構 大学教育・教員養成開発センター FD・学習支援部門の報告書・資料より)

【資料5】平成21年度後期 教員による自己評価書の例（一部抜粋）

系別	授業題目	学生の授業態度に対する改善	授業の教育目標達成に対する改善	授業の難易度,内容量に対する改善	授業改善の独自の工夫
教科教育科目 ※1	理科教育C IV	教育実習後の授業だったので、直近に経験した実習を振り返らせて内容を展開するなど工夫をした。また毎時間の出席確認や遅刻の場合授業後に遅刻理由を聞くなどして、学習意欲を高める工夫を行った。今後実感を伴う学修を構成したい。	シラバスに記載した点から評価すると、概ね目標に達している。特に、学習指導案の作成、発表を通して、教育実習時の学習指導案を改善したことが良かった。しかし、グループ検討発表の際に、参加意欲に欠ける学生がおり、すべての学生に発表させたが、十分ではないと思われる学生も少なくなかった。	約94%の学生は「ちょうどいい」と回答している。学生による発表を真剣に聞き、質問-応答時間を確保するなど、学生が自ら考えるように授業を展開した。	授業技術として、話し方に気を付け、学生の意識が低いようなら指名したり、質問や具体的な事例を語るなど、具体性や実感を伴う理解を図った。学習指導案の工夫改善を図ったが、教育実習授業の実態や指導教員からのコメントも含めて発表させるようにしたため、発表しない学生でも意欲的に参加できる。指導案の発表後に、教員から①当該学年の内容目標の特徴、②教材の説明、③学習指導上の留意点などを補足説明したので、学生にとって有意義であったと考える。
教科研究科目 ※2	社会科研究B II	前期の反省から、後期の授業の最初のガイダンスで、授業内容、受講態度、評価について丁寧に説明した。受講態度は、おおむね良好であったが、担当したクラスによって差がみられた。一人ひとりの学習状況を丁寧に見取って個別の声かけや支援を行いたい。	互いに学びあう姿勢をクラスの中で作り上げることに力を注いだところ、おおむね目標を達成することができた。しかし、社会科に苦手意識がある学生や興味を持っていない学生にまで、丁寧に指導や支援が十分にできないまま終わってしまった。私自身の専門性を高めることに努力する一方で、学生のニーズを把握することにも力を注ぎたい。	「授業の難易度」、「一回あたりの授業内容の量」については、すべての授業で「ちょうどよい」という評価であったが、「本授業のための週あたりの学習時間」は、ばらつきがあり、15~30%の学生が「なし」と答えていた。その点に関しては取り組みやすい課題を少しずつ、学生の状況に応じて出す必要があると感じた。	前期と同様、学びあい、高めあう人間関係作り、クラス作りが心がけた。学生のよさを積極的にほめたり、クラスで認め合う場を設けたりするほか、少数の意見を尊重し、クラス全体で共有するように心がけた。
教科研究科目 ※2	理科研究A I	出席状況で点数が決まることを事前に掲示、シラバスで学生に示しているので、掲示やシラバスをみることを徹底させる。	記載なし	難易度や量は、適切な状態で運営されていると思われる。学習時間が少ない、レポートの内容を増やすことで対応できると思うが、実験を中心とした授業であるので、当日きちんと出席して実験を体験することが重要と考えている。	究極の目的は有為な教員の養成であるので、化学を専攻した学生には、化学の専門的講義、演習、実験をしっかり学ぶ意義が理解できるように、化学の専門を生かして学外の教育現場で実験の演習・指導を行う実践の演習、実験授業を開講している。理科研究では化学マジックを演示して専門外の学生に理科の楽しさ、おもしろさを伝えるとともに、実際に小学校で行われている化学系の理科実験を体験することにより、安全に確実に方法学修できるように配慮している。

※1 教科教育科目全体の自己評価書回収率 85% ※2 教科研究科目全体の自己評価書回収率 91%

(出典：愛知教育大学ホームページ掲載)

教育創造開発機構 大学教育・教員養成開発センター FD・学習支援部門の報告書・資料より)

身近で面白く平易な話題

他の人の考え方を認識するようにした。そのうえで、問題にたいする多様な見解を示し、講義で提起する新たな視点を、より理解できるように工夫した。

○課題を学生に合わせて調節する

・学生の興味・知識・技術などに応じて、適宜課題を調節する。学生自身が手を動かして知識などを身に付けることができるようにする。

(19年度)

○毎年、学生の興味ある領域・分野を探し出す

・セミナーについては、毎年学生のテーマに関する興味が変わるため、興味のある領域・分野を探し出すことに時間をかけている。

○学生の先入見を打ち破る

・心理学を、幅広く正確に理解してもらえよう、知覚心理学や認知心理学、学習心理学など学生にとっては心理学とは思っていない内容を中心的に教えるようにした。



(17年度)

○できるだけ身近な現象を

・高校での物理は難しく取り付かなくなっていくという印象があるので、できるだけ身近な現象を取り上げ、高校で物理を受けていなくても理解できるように、面白く平易な内容となるよう意識している。それでも難しいと感じ、興味が持てない学生が何人か出てくるのは残念なところである。

(18年度)

○「不思議」をネタに「なるほど」と思わせる

・数学や物理学を駆使して、(実際に行くことができない)天体の内部構造や進化の様子を理解させる。地上で実験できないのに、ここまでわかるとは驚異である！と思わせたい。ゼミにおいては、話の筋道が論理的となっていないからここぞとばかりに「なるほど！」と思わせるように誘導を試みている。今年度は、学生に恵まれ上手く授業が運営できたが、今後とも上手く運営できるか、その年度の学生との信頼関係、その学生の力量を正しく見放く観察眼などと思う。今後とも学生とのイイ関係作り配慮して行きたい。講義として設定した学習内容とは別論に、日常生活に見られる「不思議」をネタに科学談義を行った(というより、脱線と言いか、そうなってしまいがちだった)。学生達が当り前と思っていた事柄の中に、意外と知らない科学を発見して、興奮していた。科学ネタは単純で、「赤い月(赤い満月が東の空に見えるがなぜ?)」「原子力発電所」「電子レンジ」などなど。

○部分ではなく全体を経験させる

・学生が興味を持って自発的に取り組んでいけるような題材を工夫している。また、部分的ではなく、作物栽培の全貌(種まきから収穫)が経験できるような題材を選んでいる。

○時代は古くても興味の持てるもの

・古典漢語(所謂「漢文」)はどうしても敬遠されがちであるので、内容的に時代は古くて